

日本写真における身体とナショナリズムへのまなざし

黄 士誠

SOAS ロンドン大学

1937 年の日中戦争以降、台頭しつつあった前衛写真のモダニズムとリアリズムは、格段に強化された情報管理政策によって、開花する間もなく抑圧された。写真はプロパガンダの道具としての役割のみ要求されることになり、帝国日本の敗戦までそれは続いた。

本発表は、1930 年代に刊行された写真雑誌『フォトタイムス』と『写真週報』において、国家宣伝の一部と見なされた予防、防諜、監視という主題において、1930 年代に眼の図像がどのように変化したのかを分析するものである。日本における眼の表現を単に神秘主義やシュルレアリスムに関連するものだけでなく、国防的プロパガンダの表象として位置づけたい。

民間防衛の基本用品となったガスマスクは、義肢と同様に体の一部を補うものと考えられ、義眼さえも生産されていた。こうしたパーツが身体から遊離し、猟奇的な記号となった可能性を発表者は指摘したい。1930 年代における眼の図像は、フェティシズム、神秘主義、予防、防諜などの表現を含め、前衛や監視の象徴と繋がっている。これらのイメージは「エロ・グロ・ナンセンス」の文脈と連なり、分断される身体の官能性を明確に強調した。また、当時のフォトジャーナリズム雑誌によく登場した眼科看板、目薬キャンペーン、防諜ポスターの図像は国民の心理状態を反映していたと推測できる。

昭和初期の日本では、前衛芸術の受容が始まり、眼のイメージがよく表象されるようになったが、1930 年代前半、戦力や労働力の確保を図るために、国民に対する病気予防の対策が立てられ、眼科の医療行政が構築された。発表の最後には、全面戦争に巻き込まれた日本で、眼の図像が本来もっていたアヴァンギャルドや健康・医療という意味が失われ、完全に防諜の象徴に転化したことを提示する。